

北九州市立大学

2011年度の「高校の先生が評価する大学」では、公立大学を取り上げる。

今回は、国際環境工学部や地域創生学群の開設で総合大学へと発展し、さまざまな大学教育改革を推進している北九州市立大学を紹介する。

「地域・アジア・環境」をキーワードに 地域社会の活力を生かした教育を推進

北九州市立大学は終戦の翌1946年、小倉外事専門学校として発足。2001年度には、文系学部のある「北方キャンパス」に加えて、北九州学術研究都市内に「ひびきのキャンパス」国際環境工学部を開設し、総合大学へと発展している。

2005年度には公立大学法人となり、独自に策定した中期計画に基づいて、次々に斬新な改革を進め、注目を集めている。

地域に根ざし、時代をリードする 人材の育成と知の創造を目指す

北九州市立大学では現在、「地域に根ざし、時代をリードする人材の育成と知の創造を目指して」をスローガンに掲げた「第2期中期計画」(2011～2016年度)が進行中だ。この中期計画は「北の翼」と呼ばれる図<図表1>にまとめられている。「教育」と「研究」を両翼に置き、「社会貢献」を尾翼、「経営」を頭(頭脳)に据え、それぞれの具体的な方策が示されている。これらが相互に連携しあって改革を進

めていこうという計画だ。

注目されるのは、これまでの中期計画が単なる計画に終わらず、現実の改革に結実していることである。それが大学全体の活力にもつながっている。では、どのような理念に基づいて、改革を進めようとしているのか。キーワードは「地域・アジア・環境」であると、近藤倫明学長は語る。

「第一は、地域社会と密接に関わる教育の推進、第二は、外事専門学校として発足して以降、定評を得ている外国語教育を背景に、国際感覚豊かな人材を育成することを目標にしています。特に、北九州地域は中国、韓国に近いので、その地域特性を踏まえて、東アジアに重点的に目を向けることが重要だと考えています。第三は、環境教育の重視です。これも地域性と関連があるのですが、北九州市はものづくりの拠点として発展し、現在は、環境問題への取り組みが評価され、国から環境モデル都市に認定されています。本学も市立の大学として北九州市が進める環境問題に取り組む教育・研究体制を整備していきたいと考えています」

専門教育と基盤教育を 完全に並列なものと位置づける

具体的な改革の中身を見てみよう。公立大学法人になって、まず着手したのが教養教育の再編で、2006年度に「基盤教育センター」が設置された。当時副学長だった近藤学長がセンター長に就任したことからも、教養教育にかける意気込みがうかがえる。

「大学設置基準の大綱化に伴い、多くの大学で教養部が廃止され、それまで教養教育を担ってきた教員が各学部にも所属することになりました。しかし、それでは意識の軸足が学部



近藤倫明学長

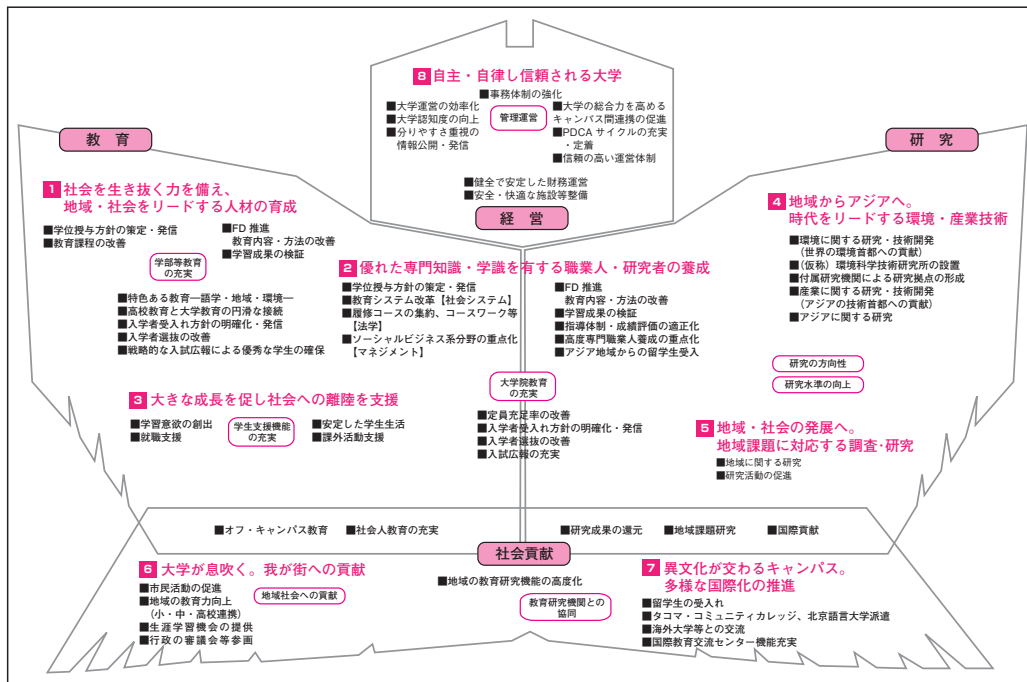


伊野憲治地域創生学群長



梶原昭博副学長

<図表1>北の翼 『地域に根ざし、時代をリードする人材の育成と知の創造』を目指して



出典：北九州市立大学「北の翼」を一部簡略化

討論の進め方など、大学の学びの作法を教えることを目的としている。だが、同大学の「教養演習」は、扱うテーマが異なるだけで、レベルは学部の演習とほぼ同じだという。学生の興味・関心によっては、基盤教育センターの教員のもとで「教養演習」で学んだことを発展させて卒業論文に取り組むことができることから、そのレベルの高さがわかる。

「学生からは、入学直後から、高校までとはまったく違う大学ならではの高度

の専門教育に寄ってしまいがちです。本学では、学部と同等の組織としてセンターを立ち上げて、学内から教員を公募することにしたのです」(近藤学長)

2007年度にスタートした「基盤教育」は「教養教育科目」「外国語教育科目」「情報教育科目」の3つの科目群で構成されている。一見すると、他大学の教養科目と大差ないようだが、その内容は異なっている。

「専門分野の基本を学ぶのが教養科目というのが、従来の感覚だったと思います。それに対して、本学では、専門教育と基盤教育は完全に並列のものと位置づけ、基盤教育は、自分の専門分野を相対化するための科目としています。基盤科目は、くさび型カリキュラムで4年間を通して履修することができ、専門分野の学習で視野が狭くなりそうになったときに、異なる新たな視点を獲得することが期待できる内容になっています。1・2年次で必修としたのも、教養に必修なんてないと軽視する一般的な風潮を覆したかったからです」(伊野憲治・地域創生学群長)

その思いは科目名にも表れている。基盤教育の中核の1つ『ビジョン科目』では「可能性としての歴史」「共同体と身体」「生活世界の哲学」「家族の再生」といった具体的な内容がイメージできる科目が開講されている。学問分野名に「概論」「総論」「基礎」などを付した一般的な教養科目とは一線を画しているのだ。

また、1～3年次には「教養演習」も開講されている。多くの大学の場合、低学年次の演習科目は、情報収集の方法、

な講義に触れることができた」と好評です」(伊野学群長)と、同大学では基盤教育の成果に大きな手応えを持っている。

学生の自主的な地域貢献活動が活発化「地域全体がキャンパス」に

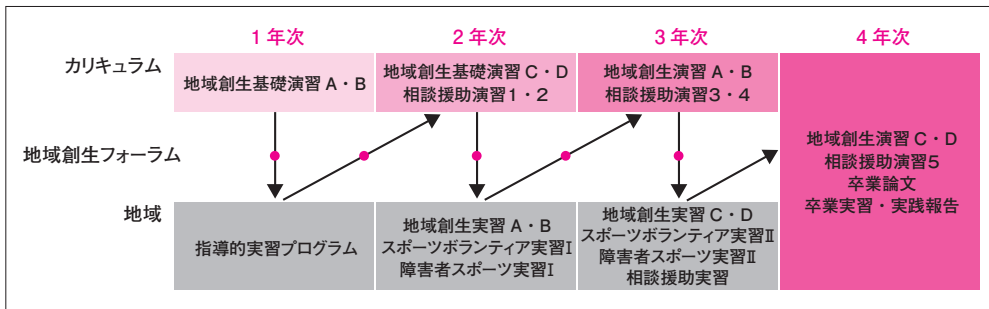
地域に根ざした教育・研究の推進としては、2009年度に誕生した地域創生学群の活動が特筆される。

同学群では講義だけでなく、演習、実習を1年次から展開し、実践的な知識を深めるカリキュラムを構築している<図表2>。1年次は必修の「指導的実習プログラム」で、地域に出て行く前に必要な多様な価値観、協働、自己認識、社会的マナーなどを学ぶ。2年次以降「地域創生実習」で、地域が抱える問題の解決に、学生と地域住民が一体となって取り組んでいく。

「授業の一環として実施していますから、単なるボランティア活動ではありません。地域社会の資源を活用して、学生が実体験を伴う学びを進めることによって、フィールドでのコミュニケーション力、問題解決力など、社会人基礎力を高めてもらうことが目標です。それが結果として地域貢献にもつながるようなプロジェクトを立案しています」(伊野学群長)

現在、約20のプロジェクトが推進されており、複数のプロジェクトに参加している学生もいる。例えば、「猪倉農業関連プロジェクト」では、地域の長屋を借りて、活動拠点「猪倉サテライト」を開設。農作業を通じた地域づくりを展開している。今年秋からは、学生が地域のまちづくり協議会の議論にも参

<図表2>地域創生学群 演習・実習と座学を連動させたカリキュラム
(教育プログラムイメージ)



出典：「地域創生を実施する人材育成プログラム」より

画する予定になっている。

1年次には、地域創生学群の全学生が4人1組のチームを編成し、地域のFMラジオ局の協力で企画立案から放送当日の番組制作にまで携わる。学生目線で地域を紹介するコーナーとして好評だ。もちろん、公共の電波で放送されるため、チェックは厳しく、何度も企画の練り直しを要求されることもあるそうだ。それもまた、いい勉強になっているといえよう。

同学群の成果を受けて、活動の輪を全学的に広げるために、2010年度に開設されたのが「地域共生教育センター」だ。既に北方キャンパス全学生の5分の1にあたる815名が登録し、多様な地域貢献活動に取り組んでいる。特に、今年度は、東日本大震災を受け止めて、何らかの役に立ちたいという気運が高まっている。

「学生ならではの発想によるプロジェクトが進行しています。例えば地域創生学群で、市内の小・中学校などでスクールボランティアを行っていた関係を生かして、被災地に小学生が応援の気持ちを込めて絵を描いた団扇を送りました。被災地から北九州市に避難してきた方々を、スペースワールドの協力を得て無料招待したのも、学生の発案です」(伊野学群長)

なお、地域創生学群では、学習ポートフォリオも導入されている。授業で身につけたこと、課題と感じたことなどを整理し、ファイルすることによって、振り返りに役立てるものだが、実習についてはほとんどの学生が記入しているという。記録に残したいと考えるほど、充実感が得られる実習内容であることを物語っている。それが蓄積されることによって、就職活動におけるアピール材料にもなるはずだ。

中国の大学生とプレゼンテーションを競う「環境問題事例研究」

さらに、環境教育については、国際環境工学部の活動が注目される。

「20世紀の北九州は重工業中心で発展してきました。21世

紀の産業都市として、今後も持続的な発展を遂げていくためには、環境問題への配慮が不可欠になります。そうした地域の実情を理解して、実体験を伴う学びとして設けているのが、1年次2学期の『環境問題事例研究』です」(梶原昭博副学長)

10名ずつのグループに分かれて、自分たちでテーマを設定。調査研究を行い、プレゼンテーションをする。その中で、チームワーク力、企画力、問題解決力などが養われていく。研究テーマを見ると、「堀川の環境保全」「北九州市の水資源事情」「折尾駅周辺の再開発計画と環境整備」など、地域に根ざしたものが目立つ。

12月中旬に、全チームの発表が実施され、優秀な研究が表彰されるとともに、選抜された5チームは、1～2月に中国の大連理工大学と合同で行われるプレゼンテーション大会に臨む。

「この経験を通して、プレゼンテーション力が養われるとともに、海外の学生と交流することで、語学力の重要性にも目覚めます。そのため、語学学習の努力を続け、大学院生の多くが国際学会で発表しています。また、事例研究のチーム内には必ずリーダーが生まれます。その学生たちが中心となって、市内の小・中学校へ理科教育の支援に出かけたり、学内で不要になったパソコンを修理して、福祉施設やNPO法人に無償提供したりなど、自主的な活動も盛んになっており、頼もしく感じています」(梶原副学長)

このように、学生主導の活動が活発化していることから、2007年度、北方キャンパスに、学生が気軽に集える「学生プラザ」を開設。キャリアセンターと学生相談室の機能も果たしている。中庭には、ガラス張りの明るく開放的な学生交流スペースも設けられ、自主的な勉強会や、ネイティブ教員と会話を楽しむ「イングリッシュカフェ」などに利用されている。

こうした成果を背景としつつ、同大学では、2013年度に新カリキュラムの導入を予定している。「授業科目をカリキュラムの中で体系化するといったいわゆるナンバリングの導入や、学習の成果をきちんと評価できるPDCAサイクルの充実・定着などを検討中です。地域創生学群で先行しているポートフォリオも成果が上がっていますから、他学部で取り入れることも検討したいと考えています」と、近藤学長は構想を語っている。